

34 16
106

十九編子卷之角

五十二下

秋野

勝若院

九輯五十二下

回外刺筆

頭陀枕中と話説を四十八城

稗史本傳を大成を二十八

這編の作者の意を速めて惣跋代る者開が中本傳の遺漏を

補ふよもこれの壁俗の幕の間多戲房話説の類あり

文化十一年甲戌の春正月下幹本傳の作者曲亭主人這小説を綴る為

案を拭ひ硯の呵し將新研を用まると時廻國の頭陀あり上總より到る一日

著作堂の松の扇を敲りて主人の對面を請ふ頑婢是を告ぐ主人の道く咱

塵を厭ふの故の間嘗み惟を垂れ客を辭して書を讀書を綴りてまの半生を

送る而已然るを世の遐途人親疎とみく雅俗とみく吾虚名を謬認めて

訪來て對面を請ふ者幾許名ぞ吾其人毎み出て言を費し日を費やま

かゞう煩へりるなりまの故の吾疾病の推て敢面をとり只相

八傳九傳卷五十二

十八

大英堂藏

識の紹介ある客のみ只得出て來意をゆめ開相識の願れど遠方なる
 未見の人の書と寄さるも皆かくの如く又吾を見まき者兩國橋邊
 夕欄戲場と看て故郷へ還るの日話柄の如く遣りぬく
 とを掉へ頑婢あるゆへ又出て頭陀の謝する主人の疾病をもて
 頭陀是と安て否野納の翁の相識某甲が紹介の旨問を齎しう枉て
 對面を饒さる多と連りぬ請ふて己さる主人己をば書齎へ召容れて
 對面を主客の坐定り其紹介の書翰と問へ頭陀答て否其書翰の
 翁の旨を知らざる者の只名を慕ふて訪まらる相識の紹介の面
 多のむといつらみより且是を偽りのものとゆを主人の安めを亦調
 戲の過らるるを浮屠家の五戒の妄語を一戒を和僧の既破戒の
 罪あり吾何を安何をいん己なくと窘めて立ちまきを頭陀推禁

りて翁且怒を治めて吾のよりを安め妄語の五戒の一れも妄語の亦二
 り或の伴りて利を欲し又誑りて慾を遂或の妄証をもて人の中と裂れ聖
 賢佛菩薩を誣る者必是人の害あり佛の所云妄語是之又小兒を
 權が如く實言るれど人の惡を懲り或の伴りをもて人の怒を解れ誑りを
 もてよく人を諫る者は是善巧方便の佛の所云妄語の如くも譬言
 翁の物の本を作りゆのみ必勸善懲惡と旨とよく蒙昧を醒ま
 が如く亦善巧方便の然を公拜の思つてと唱を破戒と罵り
 めの是誣言のゆめと詞急迫くりの解けが主人の安めを亦二
 好是のいりまじう然和僧の來意の什麼と問へ頭陀答て道く唱
 笑の閑散山居を好ま山水を愛る癖ゆれも寡聞駑才の古人の
 詩歌のを知らど其地の古實を撈み由る只名山靈場をち巡る

佛と拜ひの... 徳而這一兩年... 錫と安房上總... 序在昔房總の國... 知らざると思ふと... 昔里見氏の時上總... 其餘の知る者... 猶東西とくくうち... 人のして告るや... 師のりるを好ま... 彼人今茲の書肆... 作らまを里見氏... 彼人の未見無用...

知己の友... 大正九年の身... 觀の衰笠の二字... 隨意漫の刺を... 告ると思ふ... 載走らせや斯... 夢鬼の教の依... 事と識る舊録... 地方を知らなく...

聞きつらち笑ひて客僧妄語をいふともみごとく又くくまの善巧方便のヌらや
 夢中の人ありて吾不同とのらまゝの敵うでも知らぬ高言をいふ開の左もれ右も
 われ今吾綴り創ぬる里見八犬傳の架空の言の事實を正すも要あけり
 ども素より尚古の癖ゆゑ折々其書と求獨の安房上總の地圖をいふま
 印初の本をけりて究むる易くも又里見の舊記の其写本坊間小一
 吾知る所をもていつる里見記里見九代記房總治乱記里見軍記の
 這内中里見軍記の坊間小寫本のまじりて就中疎函ありて且訛舛も甚く
 ねば考證不備るも足らざるも里見記の人物四五本ありては之を吾其異本と
 いふも見ざよの餘に北條五代記甲陽軍鑑及本朝三國志のまじりて俗書里
 見の事と載しるまじりて他郷の人の筆をいふまじりて事きたるのみならず近
 曾上總國夷瀧郡白井御長者里人中村國香の著せし房總志料

五卷ありのまじりて全約と見ぬ足らねども房總の地理及里見の舊跡をいふ
 粗載て且編物の考むるも吾這著編の契をも憶ふ上總人の和僧の合て
 四十八城の内中今其名を存する者二十六城といふに恐らく其人の考むる
 ありて房總志料の憑るる人彼書上總の附録の卷の四十八城の辨ありて
 是と載る者二十六城之是見えと驚して其書を合て用て示其頭陀受
 戴る是を讀國香曰割居の時所謂四十八城と稱する者上總の二十城
 あり左の録を戦争興廢の事ハ別のあるるものあり今ある省く其二十城
 大田木 東鏡 政木大 全居城 根小屋城 といふ其後を
 土氣 東鏡 舍人 八幡御所 小弓 義明の事
 説前不詳之 榎本 説前不見之 椎津 説前不見之
 久保田 里見記 明應三年里見義成久保田の城を攻るあり城ま



姓名逸き ○造海天目今の百首浦の事 ○勝見天目房總治乱記の勝見御所時田左兵衛正無支配とあり國香按る御所の鎌倉持氏の餘裔歟と思ひし彼土人の説の御所の新田義貞の後裔と寺崎の御所と稱す天正後天目 ○真里谷望也説本編見えり ○池和田垣生勝浦勝浦説本編見えり ○一宮長柄説本編見えり ○小濱勝浦鎗田美濃守居城房總治乱記の載る始里見氏に從ひて三浦へ渡海を又云土岐家臣鎗田美濃守とあるを見れば後万木小属せり ○鴉臺鴉臺下總の國府臺ありむ房總治乱記の載る三階圖書助居城後万木の土岐氏小属 ○万木勝浦房總治乱記の載る万木城主土岐彈正心術頼春の貞頼入道啓岩の子之國香按る土岐氏基寺海雄寺との禪院を為弘為頼頼春三世の影像を置啓岩事小も考甲陽

軍艦十三將の内万木少弼とあり頼春の事 ○矢嶽勝浦房總治乱の載る麻生主水佐居城万木小属 ○鶴城根柵治乱記の又云鶴見彈正居城万木小属 ○鳴土武射一作鳴東羽賀伊豫守居城 ○帆丘長柄黒能大膳居城後小里見家小属と土氣阪井氏小亡 ○久瑠理望也又云里見越前守居城里見記の云里見実亮久瑠理の城を築くとわれ後小里見越前を護らせり ○佐串天羽朝倉能登守景隆居城里見氏小属 ○鬼本棋地今 ○廳南垣生武田信栄居城里見義弘國府臺敗績後も自立 ○峯上天羽天神山の上小峯上との所あり里見記の載る峯上の城主真里谷入道道環とあり本編の載る望也郡真里谷村の城主是又土人相傳く同名とを思ふ道道環との久峯上真里谷を交代せりる本編小漏る追記 ○大傳九卷五十三

四十八城の内上總小なる所二十六城其他下總武藏上野等小なる所一前説小
 据る小二十六城悉里見氏の属するを知るべし。獨廳南の城主の甲州小属せり。
 勝頼滅亡以後里見小も北條小も属せり。自立せり。以上据と讀訖る頭陀款
 びて卷を商して主人小向ひて謝して道く。御庇小よりて年未の疑霧亟小齊れん。
 始て天日と見る多如。現小書讀訖る多あり。就て又向奉る。戰國の時諸士の米邑小貫
 多寡と録するあり。既小這房總志料小も編者の言小里見氏の時知行割小
 貫高どの小者あれども。いま詳るべし。之り。公利小必考あらん。公を教めいねと請れり。
 主人の點頭然。然小吾も亦其貫多寡小思ひ以頻あざる小わらば北條分限帳小
 諸士の米邑と並て幾貫文幾百文と録し。里見氏の諸士録もかをもあけぬ。
 甲斐名勝志小粗貫多寡のふとあれど詳るる。這志と注志。物見され其大
 槩と知るべし。之思按る小田圃の收納小永幾貫文幾百文とより。今も筆帳小

是と永錢と云筆師の人の教る小。這法あり。まの永錢を永樂錢と思ふ。遠く
 永の類の假字を秋穂の美之田圃物成其價を録せ故小類との筆の異
 名と毛類氏とのも其形稍穂の孕る小似。是れ然も類の其字畫多て
 世俗田舎児などの書煩一けし。假りて永と云。永の金壹両と壹貫文とを
 金壹分の永貳百五拾文貳朱の百貳拾五文とをり。今銀價直と
 もてこれ銀六拾錢の永壹貫文の銀小幾文と書く。又の唐山もあつて錢の省
 文之當時米穀小の錢の貴き小あり。元弘建武の比楮鈔行れり。續れて
 京都將軍の中葉より餘錢も銀も寡た故小物の價の廉なり。室町殿日記
 室町殿物語を見ても知らる。是小由てこれと觀ま。昔の錢壹貫文を以て
 玄米壹石小易し其壹貫文の金壹兩なり。今も俗小云石壹兩是之石斛
 之十斗と壹石と。即石之又其壹貫文の所以あり。秩録の物成の收斂ハ三之

一石米壹石のりは是を三分て三斗五升と貢米を送る所六斗五升と又二石
 あり其一二畝者の得と又其一二明年の種子を俗云三物成是之四物成也
 是の準を知らず然れ秩録の額壹貫文も主士のゆゆる所其実の三百五
 拾文よりけん次いまご知るべしむ年豊凶の米の價の過不及あれども
 其大槩を執て石壹両と定り者之是の由て注されば額壹貫文の即玄米壹
 斛の其實の三斗五升なるべし這法則をも推せば百貫文の百石之千貫文の
 千石も其實の百苞千苞なるを知るべし貫又寡の事這外仔細あるべし
 おもえさ又秩録の高と書は又寡の假字之字子の五穀又寡同則價相
 如んとあるが如し然れも又寡も額字の類めて書は煩しけし便利の就て
 高と書來たるるべし語次云上古唐山の聖人唐虞三代及成湯文武の時ハ
 民の取る井田もて井田の確言ハ田一町方二百四十間ならん則是を九畝
 一井と云ふ

公田			

其真中の一を公田とて公田の貢米の備後之詩の兩我公田送及我私
 といふは是は天朝も上古かくてありけり仁徳天皇の御時の
 三年の貢を禁めて民を富しむるの故事あると思ふべし和漢
 戦國の世に至りては賤用續ざれば民の取るのちのづから寡くなる
 公田の法は因りて養ふを以てざるべし今の世も生れて古の道
 かへら禍彼身小及ぶといひ聖語をも亦思ふべし只故を温く新を知るを学
 好といふは之の如しと丁寧反復して解せず頭陀の所り感佩して額衝に兼て且
 道く人を誨て倦ざるは則君子の忠恕の野納初て推参して御著速の妨ある
 罪を饒さす一の如しと聞くに於ては飲び何事は是の優れ古言云
 與君一父話ハ勝於十年學又云聞名不如見面見面勝於聞名復
 とも見参仕らると告別して出てあたり是年
 冬十二月八大傳算

一輯十回五卷刊行の書賈山青堂發取も其明年の冬第二輯五卷出る
及びて這書をいふ者漸々少なり第三四五輯に至りて本傳多く賣ぬ
りぬる山青堂他事小就りて本錢續ぎぬりけん是より後書賈涌泉
堂其舊板を購求りて第六輯を刊行き然ども是も亦其人ぬら
ざりて第七輯を彫ぬる時文溪堂の幫助を以て辛くして發兌せりこの比
本傳はいちまきし時好小稱ふて其利尠くざと安えりこの西書賈の
等用ひて刊行中絶去ぬる者徒小前後五六年を歴り憊而今の書賈文溪
堂其舊板を咸購ひて第八輯九輯を續刻發兌ぬる隨は是書の流
仍類稀めて只江戸京棋のころも縣田舎間漢浦樵山約莫足跡の至る
處舟車の通ふ處年貢の出る所店賃を債らる所鷄犬の聲まゝは洪鐘の
響く所國字四十七言を知り田翁野奶山妻牧童約血氣ぬる者是書を

見て愛玩ばるる一と云風聲耳小暇るる年々是を憶る日ハ柳本傳
初板の年より光陰流る水小似て老の至るを知らざりける作者古稀又半多り
今茲天保十二年辛丑の秋八月まを星霜二十八年来本傳稿本思ひの隨小
全局を結ぶ折々彼頭陀何苦の風小吹まけんと瑤らるるも訪來ぬけり送別
後の口談訖りて頭陀が遺く昔年御教諭を羨するより一も忘れぬるわねども
年來西海南海なる九國四國を竹脚して淹留の地も多かりけり六六幾春秋を
累る疎濶の罪を饒さきり去歲より又安房の到りて某甲の院あり西ふ
わりても東ふりても只大傳の流行小耳目を敬慕するもこれいふく公習のちりり
さ京叱らまらるるんと思ひまら居一閑の門を踰て推參仕り相別れまら
僕も三十餘小近り小翁も痛く老のいぬれ琴嶺君の早逝ハ大傳の附録小識
しるしものぬら驚き悼む所も今さらぬ又いひ出て物を思ひせまらるるも

のふと、二十稔のり。さう比より故賢郎琴嶺と同居して神田のいまも。いづて
 聞かされども大の山檀かト居のるい知らで尋ねられた八代傳の巻巻る九輯早
 五の巻する年々々續出さるを待ひて聞けりけれが翁の今も恙なく在まを飲ひ
 思ふ心のたのせも一日もたやく結局編を見まなくしうい稿本の送るき綴り
 果一のい欲厭りるる一巻よりとも内見を饒さる多とこれて主人の領さて
 然九輯の又編を以第九四十六の巻より第九五十三の巻る第百八十勝回下編
 まで九巻のしと局と結びぬ追刻の首巻と共に全本一百零六巻之其四十七の
 巻の緒数多さをもて釐で上下の分ちて四十六より五巻るを今茲の及發販
 まで送る所五十の巻より下五巻も續々明春出さると云刊の書肆文漢堂の
 情願の任せよう是見多と管近る稿本四五巻を合抗て出し示せ頭陀の受戴
 きて讀み及び甲乙と兩き見て且訝りて御稿本の女筆るべし何ぞ自筆の

のふと、まへにさるやと問れて主人の嗟嘆不堪む然之の三四年來我老眼年々病
 衰して去歳の冬十月より書を讀ても字を寫ても絶て不自由なりしか只得
 婦如代筆さる。這稿本を綴りぬ。といへ頭陀の眉を頻りて開け不便る
 正ふゆり琴嶺君世のいまそり其くる折筆勞の補助るをせりん今今ハ
 千萬惜むも久み稿本の代寫を命じり門人のいりむやと問ひて主人ハ
 頭を掉て否と。洒家の昔より戲墨の門人といふ者なり三四年以前吾戲作
 する画策子の門人魁蕃子又作禮子とどの名號を出しけるもあまど開け未生の
 人ぞ一時の戲れの實其人あるふあど然文化文政年間生在なる者
 吾等字子のみまわくわいて由縁成就紹々の人を求め漸次訪來ぬる者
 八九名ありしと吾一人も是と許さば且其輩論まらう。戲墨の讀書の餘樂
 也。吾真面目のわねども是をもて早暮の給。又是をもて有用の書籍を購ん

とまきる素より宜た技之と思ひ己が欲せざる所を以て何ぞ人の施まらん入口の義
 決て兼て各這無益なる遊戯の光陰を費さんより其師の就て学向せ必
 裨益有りるべし且戲墨の師の從て学ぶ者ありき各其才の儘まると
 吾の唐山人の裨史小説を尋見て其文其巧致を極に擇んで他を效す。暗
 譚の為訪れん聊も厭らざる御所望の一條の思ひ絶えざるもの各望を
 失ひざる猶懲むまの折々訪來ぬるもの一々其杜校等のある所の為身を
 脩め家世のふたを説示し又暇ある折の老子莊子などを講まると打盹を
 催さるゝ稀なり開が中入門御辭退の儀へちうら及ぶもの戲観の琴字を
 許し又よの琴字をもて名號の做ま者吾のまらざる昔も今も儒者の琴所
 琴臺まあり開の各位の隨意まるとのふ皆欽び或の琴雅又琴梧或の
 琴川又琴魚を告る者五六名のうらとまらざる一両給の程ありて夙胡越の

如くふりけり今思ふ三十餘年の昔まらば其人猶生るや死せりや。知らざれば
 号の内中の標亭琴魚の同くまらば他吾知音の友伊勢人後齊の身もて
 窓童餘譚青磁石文まらば物の本の作者のうら惜むべし四十餘歳を身故り
 むた這他女流も遙か吾の書を寄て開が綴りたる策子の稿本を示して雌黄を
 乞ひしもの或の戲墨の弟子ありまらば其親をもて請ふ少女あり近曾
 又一藝婦の消息して其子の教へた内を理へたるまらば同きものありけり志然るを以て
 感し思ひぬれぬものも婦女子ありけり谷ざりて開が中佳奥なる真甚なりや女も
 孀婦も吾の七むらの姉まらばやえぬ老女の書を善く歌とよし和文も亦拙
 りまらば且殊なる男魂をもて獨考との議論の書三巻と奥州まらばの隨筆一卷
 又磯づゝの紀行一卷其餘も小冊子三四巻綴りまらば吾の寄て筆削とるもの
 切られけり吾の己まらばも獨考論との二巻を編述もて是の答然然も是の女流

られ。辭して久しく。文のむら。あつた。文政元年のころ。後七稔をり。を歴て。竟る鬼
 籍。入りぬ。と風の便。ゆき。是等。の要。る。又。辨。れ。も。門。人。の。い。ひ。
 実言。を。思。い。れ。ん。と。漫。言。を。つ。る。と。告。げ。頭。陀。の。感。嘆。し。て。世。の。戲
 作者。門。人。弟子。の。二。名。も。又。を。榮。め。し。て。某。甲。某。乙。と。其。書。の。名。を。録。す。も。見。る。
 病。厄。の。い。づ。と。療。養。效。驗。の。ま。と。本。復。を。祈。る。の。も。然。る。ゆ。え。も。這。稿。本。を。女。筆
 除。教。の。ふ。と。も。容。ろ。う。死。事。を。ぞ。這。美。も。示。し。ぬ。と。請。れ。て。主。人。の。嘆。嘆。の。堪。ぬ。
 然。る。と。其。の。い。ひ。言。ふ。も。緩。や。う。の。坐。し。て。徐。の。安。の。吾。髻。の。時。と。し。て。書
 讀。を。好。み。し。て。成。長。ぬ。及。び。て。一。日。も。書。卷。を。把。ぎ。て。一。休。而。寛。政。二。年。の。冬
 創。り。て。戲。墨。の。画。策。子。二。卷。を。編。で。書。肆。甘。泉。堂。が。刊。行。せ。し。り。今。亦。至。て。五。十

二年刊物の雜書物の本共二百九十餘筆。及。び。り。這。他。刊。布。せ。る。筆。記。雜
 纂。或。は。二。三。葉。の。小。紙。子。又。は。二。三。葉。を。數。へ。盡。す。へ。う。も。あ。ら。ぬ。就。中。文。化。年。回。の。書
 買。の。乞。ふ。大。小。の。物。の。本。復。の。け。し。日。毎。の。風。の。起。出。て。机。案。の。面。ひ。つ。其。夜。人
 定。ま。て。稿。本。を。綴。り。て。人。の。為。の。疲。勞。を。厭。む。亥。の。時。過。て。睡。氣。の。く。ま。書。讀。を
 起。出。て。又。机。案。の。面。ひ。日。も。あ。り。り。倦。而。年。來。を。歴。ぬ。隨。而。逆。上。口。痛。の
 患。起。し。り。年。五。十。の。至。て。六。齒。の。皆。羊。々。の。脱。て。一。枚。も。あ。ら。ぬ。且。夜。枕。を。就。く
 時。仰。ぎ。臥。せ。ば。頭。眩。し。七。堪。ら。ぬ。横。の。臥。せ。ば。さ。も。さ。も。さ。の。比。一。名。醫。と。暗
 譚。の。折。吾。の。事。を。告。ぐ。名。醫。驚。き。て。足。下。生。來。血。氣。人。の。勝。れ。ぬ。人。の
 氣。根。の。涯。り。あり。九。石。の。弓。も。毎。の。緊。く。張。て。緩。め。ぎ。其。弦。断。ぎ。る。正。を。以。て
 其。樂。心。所。も。て。名。利。の。為。の。殉。ま。る。賢。者。の。せ。ざる。所。之。今。よ。う。些。一。緩。め。よ。と

いつと一巻の理り多れば吾も答て教諭兼りひね各利の為の身を忘て無益の
 筆硯も耽るふわらねども少り一時怒の義侠の心あり今に至る其癖も
 一旦書賈の諾ひ稿本を号兩の儘ま時他等々發販の時日後利を失ふ
 妙なき是も亦不義の似れば事の及ぶと思念思ひひきと謝して是より
 夜学せむ物の本の稿本も年二板と相定て其餘の需小應あるまなく夜人
 定と限のしと多く枕而就し身も漸々安くおぼえて仰臥して瞑眩せむま
 養生と示とたけ程の吾還替の年丁亥の夏より秋まで大病の眼あり命危
 ちも幸の七瘵りぬた左右も程の九年以前癸己の秋八九月の時候ありけり有
 一朝不圖起出ける右の一眼見るをぬむち驚き且訝りと故思示さ小瞳
 子上的方流る療治さるべとのひけり其後親族朋友書賈等まで治療を薦る
 者多りしを吾敢従つども且おもへらく吾の幼稚より眼の患るく流る目も病と

ゆいど然るを今一朝の右明と失ひし年来讀書筆研の疲労るべく且冬春毎
 高き火桶を坐右に置れて机邊の寒氣を防ぐり既久く其火氣何
 時となく右明入りて乾くささるるみぞゆいびざらん譬言老樹の元枝枯す
 異るる非如醫醫療術を盡さとも草根木皮のよ及ぶるふゆい守思
 ち一日も筆研を排斥せむ初硯心見難て毫を染るふ不便ありしを
 熟て不便も思ひ其後故鬼の喜ふ丁卯一年も世渡りるまば忌ども閑て
 又筆を把らざるをぬい其次の年四谷へ移徒ちも左明の異なるも
 著編の倘年々終りぬる程の戊戌の春の時候より何となく左明も亦醫
 ちも夏に至るに其異なるを覺し猶悟らざるも眼鏡の
 曇りし故るるに謬思ひて俗の本玉と飲り水晶製の眼鏡の價貴を
 厭つ此彼と多く購求ち掛替々々凌ぐるに己亥の春に至るに

うきみて病眼ると知りまがし本傳のまじ大團圓に至らね書肆の需と推
 辨もゆせ猶辛と綴る物まの外もあけり。憊而去歲の春ま本傳の
 稿本も故の如く十一行の細字のせりうども夏に至りて只矇々朧々として細
 字を寫さぬるね其稿本を五行の大字のし其もは撈りあて去歲の秋九月
 本傳第九輯四十五の卷まで綴り果して刊初の書肆文溪堂の責と塞か
 くと明年四十六の卷以下と綴り果さん心許み先や倘くある程今卷
 ろとも綴らざると思心と戻して第九輯百七十七回一顆の智玉途一騎の驕將と
 懋まとの一段と五行或へ四行の大字のまなるふ字のり鈴釘兵兵めて且
 墨の續うぬ処ありて讀ごーとひ開と宅眷の補せるとなる程十一月に至り
 天宛雲霧の中在如く又朧月夜の立ふ似て一字も寫さぬる程只筆
 研不自由るのまら書畫を見ても楚と見え。僅に晝夜と辨東西を知る

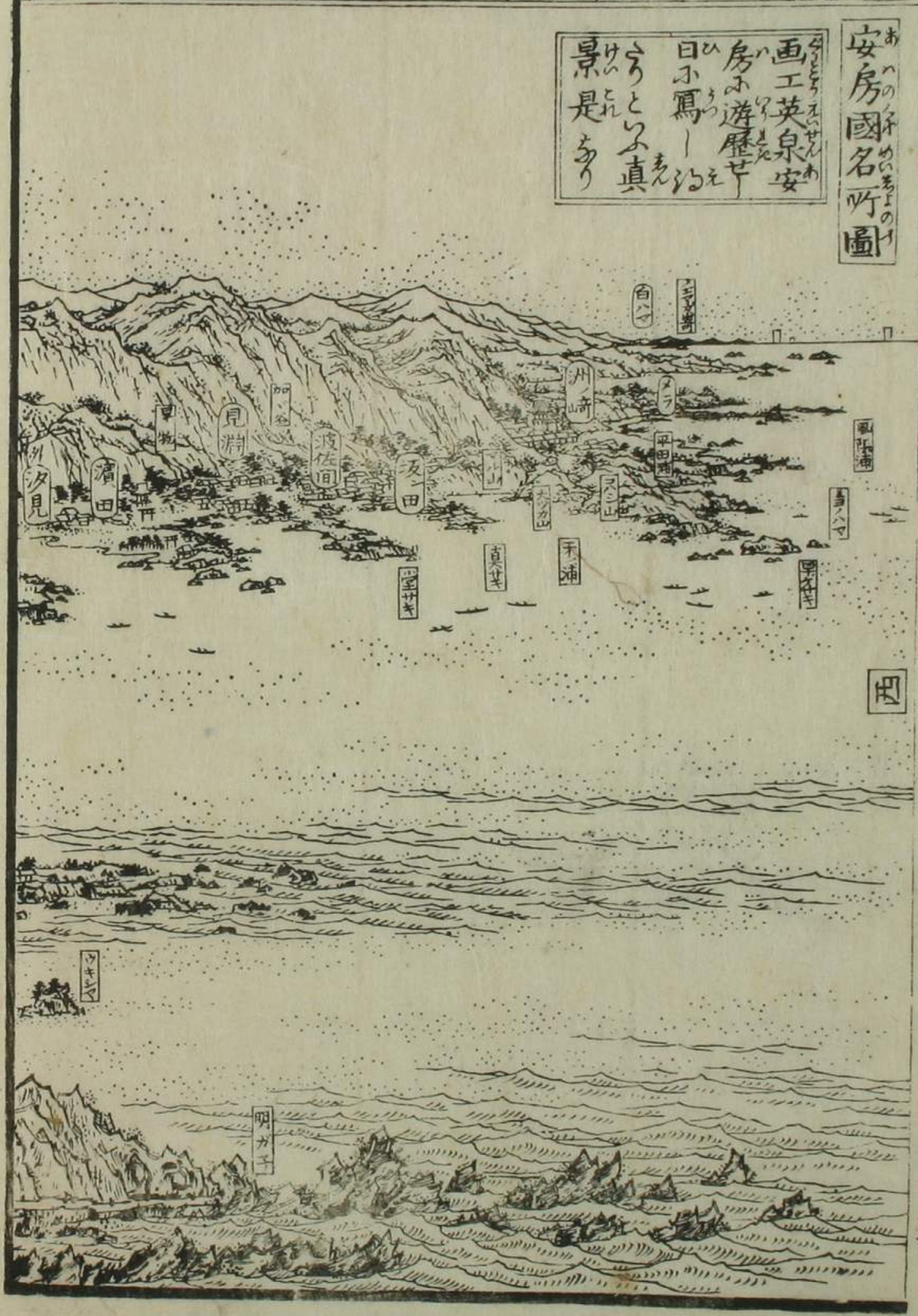
のいふともせん術きければ書案と退け筆と投捨て獨歎息のあまうか
 うららるるかひをさるけれ見えさるる書卷川の猶こころ世やとうち詠して
 爐の寄ての居程の文溪堂及貸本屋などの者さゆ知りて皆慨しく
 思ひぬるく為の代寫ま死人と素るの意の稱ふ然る者のあるべくもわらむ吾
 亦失明て生甲斐もさるけま這年の秋九月より次の年ま老人の薦る醫師と
 三石まで轉藥まぬまども毫も效驗あらず然る今茲の春に至りて
 吾又あつふ八犬傳の今昔有る大物の本なる始ありて終るるは只看
 官の飽ぎ思ひんのまら文溪堂が為の後々まも利を全くまらて迷憾
 こそあらんざらち人の為の謀りと忠らぬい吾も亦恥る所之然るは吾孫興
 邦の倘乳臭ある机心とせま且武藝と好み本性なれば憊る幫助ある
 ぐもあらず他が母の人並ふまら書もまられば教て代寫まらとやわらふ

思ひ入り第百七十七回の中音音が茂林濱で再生の段より代筆を以て一字毎の字を教へ一句毎の假名使を誨る婦人の普通の俗字も知る稀めて漢字雅言を知らざれば假名使をばはぶるも辨へず偏傍もあつた只言語を以て教へて寫まる吾苦心のいへうもあつて況て教を兼て寫る者も夢路と辿る心地して困りて果へうら泣くや然而代寫一枚の満れ讀友と各々又教へ傍訓を寫さる熟字を知らざれば又句讀をあらはねば讀時或は字を脱し或はるる字を添て讀り讀まらぬ知らざればあつた口授せしめて寫る者の艱難を思ふいと痛まらざれば己をと思ひを又思ひて筆捨の松のふる葉も言の葉も子もふをくそかまらざるぞ鳥交とら詠めて且慰らる一二卷代寫させぬ程の他もやうやく熟て苦心初め如ゆゆも偏傍など消えたる人知りて言を費さる舌の疲るまで至らざる

編中の出像へ代寫さるる者なれば吾只其人物と圈點して画工に傳ふる委細の注文と代寫さるる者の稿本の書きの寫本も吾の如く寫りや否心許る思へども術あり況文中の故事などを引用しんと思ふる原本の涉らざれば暗記の失われんを恐る命とて其書と合出させ讀まらぬ漢籍の及ぶべしゆも假名まじりの古書とて傍訓を以て讀み強て讀まらば駄舌侏離めて要をさるるに援用ふぐもあつた寫さるるの教もさるるに讀まらぬ吾見らるるに難受の實のせん方あり然れども教誨を兼る者の困りみかとも倦倦よく勉めぬるにこの十卷を綴り果して局を結ぶに至らん縫刺の技薪炊の事などを他が職分するに文墨風流の事み代らるる其要を做さるる欲するに理ありとも理ありとも知りて月を累ねて今茲辛丑の秋八月廿日との日の本傳第百八十勝回の下編附録目諸將の成敗其尾を備へし

安房郡之
 伊豆平太浦
 あり布良老
 下目小なる
 スサキのかけ
 るううてい
 布良のその
 うう小根本
 老口へかれ
 てふをひき
 ガサキハ
 あり
 洲崎と云
 スサキと云
 洲崎ヨ
 川名伊戸
 坂足小沼
 磯野大石
 中里相濱
 布良
 マライン里
 余海老
 根本港口
 是より神倉
 今道ありて
 安房郡之

安房國名所圖
 安房國名所圖
 画工英泉安
 房小遊歴
 日小寫
 景是あり



眞崎ヨ朝
 夷郡あり
 白濱挾珠
 院至あり
 主人の説小
 國司明神
 里見義豊を
 まつとてい
 正木府中
 本織延命寺
 あり
 富山に至る
 今ハトヤと云
 トニヤと云り
 この國ハ多
 良より元名
 ま大鋸山の
 かげふなり
 うていあり
 村の名を順
 たるせるの
 九行程二千
 余里と縮圖
 せゆあり



大正七年度

三十三

安房國名所圖

けりきりぐんえんし。やうやう。を。わら。や。ま。お。い。く。う。と。わ。ひ。つ。何々とうら
 り。結局大團圓まで稍稿。果さる。噫無益。老の諄言よと。ひつ。何々とうら
 笑。頭。他。の。感。嘆。の。聲。を。ゆ。ま。ま。姑。且。て。道。く。誠。の。翁。の。老。實。多。和。漢。今。も
 古。も。稗。官。者。流。身。う。れ。れ。も。く。ま。も。苦。勞。七。書。肆。の。為。小。難。義。の。筆。を。果。し
 多。い。有。る。心。操。る。者。と。江。湖。上。る。看。官。へ。只。号。兩。小。見。過。七。反。好。互。を。論
 ぶ。も。あ。ら。ん。適。去。の。書。の。大。部。も。人。の。為。小。裨。益。の。有。用。の。雜。纂。も。ま。ま
 か。ら。勞。七。も。功。の。る。べ。し。然。る。物。へ。世。俗。の。見。ま。く。欲。ま。る。稀。多。故。小。書。肆。も。亦。刊
 初。其。ま。く。欲。ま。る。未。る。所。へ。只。是。の。こ。這。故。小。翁。と。七。稗。官。者。流。小。做。果。し。ぬ。る。
 多。も。亦。天。年。命。身。乎。惜。ひ。べ。く。と。繰。返。し。つ。嘆。ま。ま。主。人。も。俱。小。嘆。息。し。七
 余。の。り。る。理。り。る。れ。ども。是。等。の。策。子。小。あ。り。され。ば。吾。年。々。小。編。て。も。半。業。小。做。ま
 五。を。の。ぞ。昔。清。人。毛。聲。山。小。説。傳。奇。と。好。る。隨。小。嘗。三。國。志。演。義。と。評。註。を
 多。其。妙。金。聖。歎。水。滸。傳。評。註。の。上。小。在。り。多。も。小。他。不。幸。小。七。老。後。小。失

明。小。做。り。く。と。好。む。所。と。棄。が。く。や。め。り。け。ん。又。琵琶。記。と。評。註。を。及。び。て。二。の
 子。弟。小。口。授。一。代。寫。さ。せ。て。も。稿。果。ぬ。た。と。り。昔。吾。琵琶。記。と。讀。て。是。を。知。り。ぬ。
 他。と。吾。と。同。好。め。且。眼。の。患。も。相。似。され。ど。其。評。註。の。精。妙。も。あ。ら。う。筆。を
 把。ま。る。が。如。益。唐。山。の。文。字。の。國。子。弟。小。文。字。の。老。者。を。け。れ。ば。其。の。所。と。一
 字。も。違。な。く。代。寫。せ。さ。ん。天。朝。の。言。語。と。宗。と。ま。素。より。文。字。の。國。風。も。ら。む。む。
 知。婦。幼。小。代。寫。さ。さ。る。の。管。を。構。り。て。思。を。構。る。波。瀾。曲。折。の。文。何。所。より。出。來。つ
 倉。僅。小。其。意。を。達。さ。る。の。然。ら。筆。工。小。寫。せ。ら。む。又。其。刻。本。も。婦。幼。の。讀
 せ。て。校。訂。を。ぬ。れ。ば。脱。字。を。咎。め。も。され。誤。字。を。吾。見。る。小。あ。ら。ざ。ら。ば。開。を。正
 ま。小。由。も。る。看。官。く。と。知。ら。ざ。ら。ば。校。訂。疎。と。國。之。を。笑。ふ。も。あ。ら。ん。替。者。へ
 文章。の。觀。小。管。ら。む。と。莊。子。小。り。り。文章。の。文。字。の。の。の。の。の。の。替。者。の。の。の
 多。文。揚。小。遊。ん。や。僅。小。詩。と。賦。歌。と。詠。の。も。又。枚。乘。が。江。賦。小。水。母。以。輟。爲。眼。と

吾艱子をもて眼みせん其艱子も亦のぞく。是の鳥呼の遺道なれば好まぬ
 人の誹謗もゆゑ小説物の本の大筆妙文を憎む者昔も和漢の是あり
 羅貫中の水滸傳を作り悪報の三世晒子を生れたる續文獻通考の誦
 の又紫式部の源氏物語を作り悪報の地獄の墮ちたる人の去來小見之類と
 の寶物集巻中這證文の水滸源語の稗史物の本中の大筆妙文を其傳
 山賊の義侠をもて或の貴介淫娃の事を旨と綴りて和漢同日の是等の誦あり
 尚去らざる西遊宇津保も大筆妙文なり是等の作者の晒子墮獄の
 悪報の誦ありこの唐の韓愈の得識名示従とりの是の由であること
 觀る吾も亦大傳を作り悪報の老て半盲の作りぬたとの誦請もやわ
 べらん非如何ともいつの吾鬢歳より讀書を好みて和漢の歴史諸子百
 家の書小説傳奇歌書草紙物語に至るまで観へざる所も聖教賢

論の辰守のいふもさる醫書佛經ト巫方位皆其一隅と獨學して孤陋
 なるも和漢の治乱君臣の得失士農の務むる所工商の巧拙好直貨殖
 清貧の樂む所獵漢牧樵ののる所各所舊跡禽獸草木の名戈と不
 戈と人情の厚篤浮薄其大略と識るを以て學問の餘樂とせ且蒙昧を
 醒さん為小戲墨の策子と編做して書肆の需の應に其潤筆を足ら
 ざる母小衣食を省き節儉を旨とて和漢必用の書籍を購求する者五十有
 餘年其書藏めて五六千卷六十餘櫃に至りて貽昇んと思ひ子に早逝し吾も
 亦老眼衰眊して讀書得るべき作りく成沽却て紙魚も漏さむ事皆
 画餅なるものなり猶肚裏に残りたる此の書あり文ありを以て恁むるの口を
 利而已不幸くの如く隨昔唐山孔門諸賢の得失と思ふ子夏も老
 子と喪ひて竟小失明の作り時曾子是を吊あてうち哭死し子夏も亦ら

哭^なて噫^{あは}天^{あめ}を平^{ひら}吾^{われ}罪^{つみ}なりと吐^つけり曾^{そう}子^しがりて商^{あやう}子^し夏^あ何^{なに}ぞ罪^{つみ}をえ
 やそ其^{その}三^{さん}罪^{ざい}を擧^あげて是^{これ}を責^せり子^ま夏^あ杖^{つゑ}を捨^すて謝^{あやま}りぬたといふ語^{ことば}の禮^{れい}の檀^{だん}
 弓^{きう}不見^{みえ}えり夫子^ふ夏^あの賢^{けん}なるを以^{もつ}て猶^{なほ}三^{さん}罪^{ざい}ありて正^{ただ}しむる況^{いは}己^{おのれ}が如^{ごと}き者^{もの}の五^ご
 罪^{ざい}も六^{りく}罪^{ざい}もわらへず。あれども曾^{そう}子^しの意^いは子^ま夏^あが三^{さん}罪^{ざい}の悪^{あく}報^{ほう}を失^う明^{めい}る
 とのふゆらむ子^ま夏^あが罪^{つみ}なりと吐^つけり就^つに其^{その}三^{さん}罪^{ざい}を責^せる老^{らう}て子^しを喪^うひ又^{また}
 失^う明^{めい}るを以^{もつ}て數^{かず}へて其^{その}行^{ぎやう}を知^しせし尙^{なほ}去^さらむ伯^{はく}牛^{ごう}の大^{だい}賢^{けん}なる其^{その}徳^{とく}行^{ぎやう}
 顔^{げん}淵^{えん}子^し騫^{けん}と伯^{はく}仲^{ちゆう}も然^{しか}ども彼^か身^み不^ふ幸^{しやう}なり病^{びやう}を命^{めい}危^きなり時^{とき}孔子^{こうし}
 是^{これ}と訪^{たづ}ふ其^{その}臭^{くさ}氣^きの堪^たまらざる病^{びやう}の林^{りん}の入^いらざる其^{その}容^{よう}よりを以^{もつ}て取^とりて死^しえ
 命^{めい}なる年^{ねん}此人^{このひと}の病^{びやう}の如^{ごと}くら歎^{なげ}けり其^{その}罪^{つみ}を責^せむ伯^{はく}牛^{ごう}素^そより罪^{つみ}
 ありれば約^{やく}莫^な人の非^ひなり者^{もの}の二^にあり其^{その}罪^{つみ}よりざるを擧^あげて怨^{うら}むを以^{もつ}て知^しる
 即^{すなは}朋友^{ともだち}の信^{しん}も又^{また}只^{ただ}己^{おのれ}が好^{この}憎^{にく}むを以^{もつ}て其^{その}合^あはざる所^{ところ}を擧^あげて是^{これ}を責^せる好^{この}て人の悪^{あく}を

八代傳九輯卷之三十三
 文化^{ぶん}年^{ねん}間^ま浪^な速^{そく}ふ赤^{せき}水^{すい}と號^{なづ}かる者^{もの}あり播^は陽^{やう}五^ご島^{しま}名^なの惠^ゑ迪^{てい}字^じ文^{ぶん}敏^{みん}と稱^{なづ}
 五年^{ごねん}己^{おのれ}辰^{ちん}秋^{しゅう}他^たが著^ある赤^{せき}水^{すい}餘^よ稿^{こう}一^{いつ}卷^{くわん}あり其^{その}編^{へん}中^{ちゆう}の吾^{われ}を論^{ろん}する酷^{こく}
 且^{かつ}吾^{われ}を比^ひする原^{げん}壤^{じやう}の蹲^{つん}居^こを以^{もつ}て五^ごを罵^{のの}る其^{その}賊^{ぞく}を以^{もつ}て當時^{たうじ}吾^{われ}友^{とも}京^{きやう}師^しなる
 角^{かく}鹿^{らく}比^ひ豆^{とう}流^{りゅう}是^{これ}を吾^{われ}の告^こを以^{もつ}て解^げ嘲^{たう}の文^{ぶん}を作^{つく}らんとしを以^{もつ}て吾^{われ}許^{もと}さざる且^{かつ}
 論^{ろん}と道^{だう}く好^{この}て人の悪^{あく}を以^{もつ}て者^{もの}の聖^{せい}賢^{けん}の憎^{にく}む所^{ところ}に他^たと吾^{われ}との相^あ識^しするも且^{かつ}織^お
 林^{りん}の怨^{うら}むも他^た何^{なに}等^{どう}の人の如^{ごと}き心^{こころ}の吾^{われ}を論^{ろん}して忌^こ憚^{たん}るを以^{もつ}て罵^{のの}る是^{これ}
 必^{かならず}狂^{きやう}人^{にん}なり。狂^{きやう}人の走^はる時^{とき}不^ふ狂^{きやう}人も俱^{ともに}走^はれば是^{これ}狂^{きやう}人の異^いなるを吾^{われ}少^{せう}なり
 時^{とき}より争^{あら}氣^きある人^{ひと}の如^{ごと}き他^たが如^{ごと}き齒^はの掛^かる足^{あし}らざるを以^{もつ}て可^あ惜^{あは}紙^し筆^{ひつ}を費^つして
 解^げ嘲^{たう}の文^{ぶん}を作^{つく}ら大人^{おとな}氣^きなるべ。吾^{われ}今^{いま}赤^{せき}水^{すい}餘^よ稿^{こう}を閱^{くわん}する他^たが弟^{あに}二^に子^しを
 悼^{たう}む文^{ぶん}の其^{その}子^この遊^{あそ}女^{にょ}冶^や郎^{らう}の哀^{あは}慕^ぼせざるを以^{もつ}て榮^{えい}を其^{その}心^{こころ}術^{じゆつ}の陋^{ろう}を以^{もつ}て知^しる
 不^ふ肖^{せう}なり。國^{くに}禁^{きん}を犯^かさざる不^ふ仁^{にん}不^ふ義^ぎの如^{ごと}き年^{ねん}々^々の編^{へん}次^じなる物^{もの}の本^{ほん}

世の裨益あるものとす。大官允可ありて刊行の書肆并書画工厥人貸
 本屋等も是れ由て衣食するの彼一人聲を頌して云云と罵ある人の
 名利と媚嫉のありきや。竟る今江戸の戯作者多かれども他吾等の論と
 這悪言を出しぬるの既小学問ありき。思戲の策子と旨と綴るを似けり
 憎むゆゑゆゑん是争と好し他馬を吾志を知ん昨今ある赤水餘稿を這地の書肆
 等小尋し其書名も知る者も。あらば是賣れざる元籍へ他其書を賣ん
 吾名を假りて編中の這悪論を載る飲是も知るべし。并に解嘲の文を
 作らば他が謀る所脂で赤水餘稿の報筆を世の引くべし似るべし。己ねくと推
 制を毫も掛念せざる人告を忘るる言の便宜も思ひ出で俵れ
 三十餘年の昔を語りあける人。まづこの世の火盤を曳上りて一霎時
 烟を吹程の頭陀の只管感服して翁の唐の張公藝の垂流もやあるべしん

忍辱ハ我佛の第一の教なり。野納等が及所ありき。現の漢学をまざる者ハ
 及徳の謹慎の理を思ひ。動もまれ論を好て人の悪をい者あり。況悪を
 悪として論と怨を思ひ。俗の無法馬鹿物の庶たる。公翁らも孰より
 其悪論を忍ぶべし。只感服の外なき。就て又問する。近曾這地の書賈等が
 翁の舊作る画策子物の本と怨の再板と是を翁の告を己が自恣出像と
 新くと刺像賢詞書をを増減も。是を新板と偽り賣僻ハ公翁の
 辨論ありて本傳の附録なき。識着けのひある。是を知れり。まづ今
 茲春正月下谷の書肆英某が刊行する雅俗要文も翁の著述なる
 猶疑ひ思ひあり。其書の自序の天保十二年春正月とあり。序のひ。其
 月の軀で彫ると發販せむも。且編左の故賢郎琴嶺君の畧注あり。
 賢郎ハ七年以前乙未夏五月八日の物故のひある翁の自序の文と歲月の

是相違り。且其書の著作堂馬琴作と録しもあらず。馬琴の自序の
 戲號も合巻物の本自稱あるもの。譬へ南畝の戲號狂詩の寝惚と號
 狂歌の四方赤良又香花園と稱する。如し意ある雅俗要文の戲作ならん
 戲號と録しゆべしもの。且文中の誤寫あり。自序の校訂を経ざる者の
 似たり。這は甚麼と問れ。主人答て然りと。其て然れ。拙著雅俗要文の
 文政十二年の春江戸伯樂町より書肆永壽堂西村與八の需の心と。同
 年の夏六月稿本成しを登時與八の取らせ。其後彼書肆の活業如意
 あり。刊行あつた。と聞之。詰来る。と。其のあつた。七十有餘年を厭止る。其
 今茲二月時候雅俗要文出版あり。と人の噂の安知り。と。うち散馬に其
 印本を買取らせ。婦幼の讀ませ。今客僧のゆるが。如し稿本の自序の
 文政十一年夏六月の吉とあり。且其序の永壽堂の號を載し。彼英文の心

寫更めて其堂號も自序の歲月も皆偽り。と。このあつた。と。此の
 英文許遣て其刊行の始末を問せ。他の永壽堂の宅眷より。吾稿本を購
 求せ。馳て筆工を再寫させ。刊刻し。と。至る。何とぞ。風く。吾の告て。校閲せ
 らる。且自序の歲月と序中の堂號と。悉く寫更り。と。人のいふ。僻事
 又是等の著述の馬琴といふ戲號を録し。と。相應し。と。又本文及
 畧注にも。訛謬あるを。後思ひ。これども。永壽堂胡越の如く。ありて
 久くある。其板下の寫本を見せ。徒らうち過た。是等も必補
 刻せ。死者之先自序の歲月と馬琴の二字を速削去る。と。重て。い
 遣去る。美り。いひ。風く。告ま。る。と。然る。よ。心も。つ。今。ま
 畏り。い。い。谷の。ゆ。を。鶴。不。發。販。と。り。一。千。あ。ま。う。發。賣。と
 への。い。ひ。あ。る。や。不。言。心。許。み。然。而。其。印。本。を。婦。幼。の。讀。ま。せ。い。ふ。感。傷

ましく不しく吾又別紙綴りて取まべし先其稿本を見せよとのいせし他公て
花鳥文素の稿本の既書林行事免許の印信の且、曩に刊刻を
いひぬ开と先生告て校閲を乞さうん故あり先生に刊刻の疎悪を嫌ひ
あのみ其刻板に彫刻宜しうらむ見せまらざるも意不稱ふべし
と思ふことあり。這故に吾又別人をもて遣しといつて趣あるは、其板
疎悪るべし吾買取るべし其刻本を見せよと重てのいせし他又、合て否
一本の做せしむらむ。百人一首の附録を志ぬる。其製本皆賣出と
今いふ。異日捐せし見せまらざる。今日も竟に見
せし他に十餘許さらば比す。年々吾の戯墨を乞て赤本事始又
女西仍又金魚傳むらむ合巻の画策子と云く刊行せし者も今
然る要事ありけし。自恣理不盡るる。そのいひ。吾あて談せしと

思ふも吾脚久く衰て後轡のゆるぎれば一町も出るのゆるぎ。況てか煩
る身さへ心を役せられん。本意のゆるぎ。既六日の菅蒲十日の菊のゆるぎ。
いともゆるぎのゆるぎ。と思ひ捨て果さる。只彼二書と具眼の人の條を
知らし論むる者もゆるぎ。欽と云はし。是ありし。及る書肆の利の刊刻を
作者の名の為の恥るる。氷炭何ぞ合し。ゆるぎ。或は吾舊作を再板と
新板と偽り。或は吾舊稿を購合りて恣心の刊行も畢竟吾名號を售る
者也。其書の好否と知れる。ゆるぎ。吾名號を售る者。吾の告む。て各
恣心の抑何る意ぞ。世の俗情の偏強る。理の暗く。利の捷まる。
大槩の如く。如く。鄙語云長生をば恥し。吾上り。吾上り。吾上り。吾上り。
うち咬たさうければ。頭陀の然と。慰めて。人文字ある時。苦勞する。吾上り。
志への人のゆるぎ。理り。就て又問する。朝夷巡嶋記。又俠客傳。美少

年録も尚半分して結局は遠く彼翁の病眼りの如くは續
出さるるの如くは百年の後凡筆を以て他人の是を續ぐ者あり事損ぬ
あそびつもの主人の點頭て然る唐山小の如くあり雁宕山推り水滸後傳天
花翁が後水滸傳及續西遊記後西遊記の如くは作者の隱微を知らむと七
蛇足を做す者之這故の如くは玉の如くは全くとて尾を以て是を補つ
誰れ連城の代まかせんや縦下和の如くは鼻を接して走る一己を知らざん
知らざる似而非作者の唐山の如くは開いたれ右もあは巡嶋記俠客傳の
刊り浪速の書肆の如くは其書画板下の寫本を兩工の如くはさせて遣ふ
吾老て厭く且志も異るる老眼の如くは如くは時下等雨の如くは
今に至る但俠客傳の吾得意の戲墨也世の看官も五輯六輯の出
俟つ者君と云えざる是を續出さるるの故之又美少年録の本傳と

等た文溪堂の藏板を以て結局を編果さまく思ふも既の上中
ゆる如く婦幼の代寫を以て果さや否や我ら如くは知らざる隨筆
みども文溪堂の需小志の如くは年來抄録をける書どもを讀むに安ま
まらふ其人を以ていふも只長夜の徒然の吾昔作の物の本の三
十有餘年の及ぶと婦幼の讀せしむる世と隔る人の戲墨を創て
見る心地して忘るるこの如くは況其文の拙きと作りざるもいふ
も今もかかると思ふも有昔衛の遠伯玉の五十の如くは
四十九年の非を知るもの如くは他は異邦の大賢も五年毎の一化して非を知る
るも易かるべし開及ぶべし吾の偶昨非を知るもの然本傳を
初筆の二十八年前の舊作の四輯五輯まで體裁今と同一の如くは開の
我の慶て且流行同ドクねべし因て又憶ふ本傳第一輯二輯の八房の



八ノ巻七頁下三

四二

大徳寺



八ノ巻七頁下三

大徳寺

犬の毛色の形牡丹の花の似たることを訝りて這義と吾の同者関東陽後
 後山英子其他も有りけり其後故思興繼鈴有年豊翠君もも訝りて
 當時吾々本傳結局に至りてあつて知らるべし其の
 ける友人の皆同好の女子ありし或は二十四五歳或は三十七八歳と皆不幸
 ちて身故りぬ業平朝臣の歌うれぬども吾身ひとりもの身も七衛門彼
 八房の犬の毛色の一解を綴る及びて憮然として懐舊の堪む口授の筆を
 止る及ぶ只その落涙のさるる吾知音の友の本傳を見果むて早く鬼
 籍の入り者出羽の茂木巽あり江戸の浦生秀實あり伊勢の標亭琴魚
 あり是等の文化文政の間の終一杜伎今茲又輪池孤雲奈須の三公不録の
 其數のあはれども去歳の秋の老妹を喪ひ今茲の春の老前逝まぬ又翠君の書画
 小説を嗜む同好の風流士ありし初老るる陽月初五小彼あり有佳れ廣

大江戸の知音の友の地を拂て今一人ものるる只牟礼松阪の両他御の黙老の條
 齊桂窓の同好あるの和漢の女子大部の書を著者著るれども一世一部の過たざる
 の吾の大部の戯墨四本まで綴らまけし故に果さる者三本あり我を老生ても
 足るさみければ長生も亦妙ありぬと今悟るを悔いければこの歎息をうらむ頭
 陀も俱小鼻うちらうておの洪歎理の但翁の相識知音のさるる江湖上の物の
 本を嗜む少社のいさよ這書を見果むて早逝去けりもさあらん獨安房上總
 人の八犬傳を見むと何故何と問へ里見氏の我國が基本他御の人の作見るの及
 との者まゝと告げば主人のうち笑ひて田舎児の頑る然る僻意もまぐる蓋稗
 史物の本は皆架空の言の何ぞ其事實を問んや只其作りざるの新奇なる
 文の巧致を弄ぶの壁は呉蜀の人三國の事我國が基本他御の人の作見る
 及むと三國志演義を讀む者ゆんや笑ふべし當時上野の里見氏も安

房の里見と同宗ゆ。桐生小在城を後小由良國重一書小由良國重の伐滅さる其餘胤出
 拜の到りて藻上氏の臣と仕へて六千石を領さとの里見越後足利の一人後
 罪ありて死を賜ひぬ其後又奥の忠臣里見十右衛門の房總の人は是等と
 亦何とのや然本傳の地名も今と同様の者尋ぐゆ。譬安房の富
 山の如き土人今は是をトミサンと喚做しう。あるを本傳のトヤマとて是等ハ雅
 俗今昔の差別ぬれ又洲崎ハ土呼スノキ然るを本傳ハスノキと讀せて江戸
 深川多洲崎と同稱を只是のりる。三國志演義多落鳳坡又水滸傳多
 史家村の如く作者の作設けたる地名たるを益稗史小説の自由有餘
 王野々を土人の今の稱呼と違ふとて笑ふゆ。ん開々小説の小説とて知る
 られば辨るる足らぬ又人名も胡意稱呼を異ふて實の据らざるも間
 是の譬ハ足利成氏の讀て是をシゲウヂといへ。何とらハ當時足利学

扱多一老僧の隨筆ハ成氏と重氏と書うゆ。是ハ由てこれ觀ハ成氏の和訓
 シゲウヂなる支疑ひる。其の美ハ近曾南畝莠言其他の隨筆も載るる
 吾辨を俟ど七知る人ハ知るべし。因て憶ふハ結城成朝ハ持氏重氏の餘
 黨之重氏の一字と授けらるる然成朝の成も字の如くありて讀て
 シゲトモとそりへけは其の例を以て推さるる里見義成も當時の稱謂ハ
 ヨシシゲなり。是も亦知るべし。去るも本傳ハ胡意其本由らど
 則世俗の訛る隨ハナリウヂナリトモと傍訓せし實録もゆと諦さる
 開中ハ兩管領定正顯定其名の和訓を異かせど及て酷く貶せしハ
 古將と弄ぶ似ては亦ある所為也。彼兩管領ハ父祖の
 時より君臣の礼即と思はる是乱世の一驍將太平の逆臣なれば下剋上の罪と
 心誅せざるをいふ且定正の不支る顯定の機変る俱ハ久しむて

子孫凋落あそん至りく父祖ふその不忠ふちうの餘殃よこぞうを竟つひて天理てんり順逆じゆんぎやくの應報おうえうあるを
 世よの看官かんくわん不悟ふぶつらせんとかくまむふ作設さくせつけいい思意しういの鄙語びんごのうそ胡虚ここより出いず。
 眞實まことありふんん然しかばあの物ものの本ほんの是これ等の用意よういよりいればも房總ぼうそうのあのさらに
 大おほを悟さとらぬも多おほのべと論ろんぎ程ほどの人定にんぢやうの鐘かねの响ひびくふ頭陀だうたの驚おどろきて憶おもひぞ小夜せうやを深あく
 たり告別こくべつ稟りやうとと遠とほくを身みを起たりつ跌たふその燈あか托たく地ちと推おし仆ふせば主人しゆじんの吐あきとたりふ
 叫こゑぶ其聲こゑ不敬ふけい馬うまをさまと愕がく然ぜんとし覺さ來きれば是これ思おもひ寐のあのさらに噫あ嘻あ盧あ舎あの
 榮華えいけの五十年ごじゅうねん本傳ほんでん作者さくしやの筆ひつ勞らうの正ただは是これ二十八年にじゅうはちねん孰たゞく夢みむむむける其その初はつめ
 夢ゆめの富士ふじ茄子かき雁かり鳥とりと大おほ夫お明あ輩はいの犬いぬ物語ものがたりを盡ある詩あり歌あり又證あとと
 戲あそ墨ぼく新あらた奇あや長なが多おほ編あ有あ是これ書あ學まな仙せん師し硯えん壽じゆ毛け穎えい汝に何なに如ごとく
 世よのいびて身みへ隠れ衰くく並ならびる名なのいち打出の槌
 南總里見八犬傳第九輯卷之五十三下大尾

○南總里見八犬傳第九輯卷之四十六至五十三下書画彫工目次

出像畫工

柳川重信 

溪齋英泉 

谷金川

龜井金水

對二樓音成

高谷熊五郎

澤金次郎

高谷熊五郎

澤金次郎

高谷熊五郎

澤金次郎

同右

淨書筆工
卷四十六卷五十二
卷四十七上
卷四十七下
卷四十九卷五十一
卷五十三上下

卷四十六

卷四十七上

卷四十七下

卷四十八

卷四十九

卷五十一

卷五十二

八犬傳九輯卷五十三

四十五

大泉堂

卷五十三上

米藏 幸太郎

剖劂人 卷五十三下

高谷 熊五郎

全書二十一輯每輯五卷約為九輯共百六卷刊刻終り

近世説美少年録第四集 中絶の所今度八代傳全部相揃の間猶又作箱小を以て推續於當寅の十月出板可俟全五冊

著作堂一夕話前集 大本三卷 近刻

南總里見八代傳總傳全書 第輯首卷總目錄氏目并八代士界傳共一卷未刻 全百六卷

右八代傳全書百六卷首卷總目錄の前書は断如中上の延引仕の此外は皆板不残相揃る是より毎年一輯毎小弥無滞捐出し并小内訛雁皮紙摺合卷箱入名製本仕る不相替追々小内求内覽可成下

刊行江戸書林 文溪堂

仙安香 江戶橋南傳馬町三丁目 坂本氏

婦人の糸虫の妙薬一包六十文 けりとのりれり
製薬本家 四谷本町の所 千日谷の上 龍澤氏
弘所 江戸元飯田町中坂下南側中程 辰沢氏

○金匱救命丸 林氏製 弘所江戸 丁子屋平兵衛

時天保十三年壬寅春正月吉日先刊所成五冊發行
同年春三月吉日後刊五冊追販全書無闕遺焉

發行 書行

京都 河内屋藤四郎
同地 大文字屋仙藏
大阪 河内屋太助
同地 河内屋直助
同地 河内屋茂兵衛
江戸大傳馬町二丁目

丁子屋平兵衛板

